

曖昧な記憶



志^し村^{むら}有^く弘^{ひろ}

（文芸評論家・
八洲学園大学客員教授）

小学生のころ、「少年クラブ」「冒険王」「漫画王」「譚海」などの雑誌を愛読していた。といっても、親にそれらの雑誌を買ってもらえたわけではない。自分の小遣いを使わずに親が買ってくれるのは、年に何回かであった。近所の友達と交換して読むのである。誰々君は「少年クラブ」、誰々君は「冒険王」というふうに、その人その人によって愛読する雑誌が違っていた。とにかく

私は漫画や読物が好きであったから、勉強のコーナーがあるたぐいの雑誌は徹底的に敬遠した。

もう作家の名前も作品名も忘れてしまったけれど、主人公の少年少女（？）が悪者たちにダイナマイトを仕掛けられ、危機一髪というところで、ピヤダルという悪漢が死ぬ直前に自分の体を導火線に投げ出して少年少女（？）を救う内容の読物があった。それが何と

いう作品であったか、作家が誰であったか、完全に忘れてしまった。よほど手に汗して読んでいたものであろう、今でもその部分だけは鮮明に憶えている。

また、こういう作品もあった。前後のストーリーは記憶していないが、小学校の先生が女子生徒と放浪（？）する作品があった（ように思う）。あるいは継子いじめの少女小説であったものか、それとはつきりとはしない。先生と生徒はお金もほとんど所持してはいない。空腹である。喫茶店の前を通ったとき、コーヒーの香りがしてきた。それを飲めば、もはやふたりにお金はなくなる。一度は我慢してコーヒー店の前を通り過ぎるのだが、先生は女の子に「誰々ちゃん、コーヒーを飲もうか」と言って、二人はコーヒーを飲んでしまう。そのコーヒーはお腹に泌みておいしかった、というのだが、そのところで記憶が切れている。記憶が切れているというより、そこで「つづく」となったのだと思う。もちろん、この作

品の題名も作家の名前も記憶していない。そのあと先生と生徒はどのようになったものか、その続きを読みたいと、ずっと思い続けてきた。

平安時代、増賀上人は、死ぬ前に碁盤を取り寄せて独りで碁を打ち、障泥（雨のとき、鞍の下から掛け垂らして泥を防ぐ馬具）をかぶって小蝶という舞の真似をした。弟子がわけを訊くと、「幼いとき、この二つを人からしてはならぬと戒められ、歳月を送ってきた。このことが気掛かりで、もしも生死の執ともなるかもしれないと思って……」と説明した。これは、鴨長明編の仏教説話集『発心集』に見えるものである。増賀は臨終間際になって、〈このことをし残した、これでは死んでもしに切れない〉という状況になることを恐れたのである。「生死の執」とは、臨終のときに心に妄念が起こって死んでも死に切れないという気持ちになることである。死に切れないば成仏することとはできない。

ビヤダルの話の結末は、めでたしめ

でたしなのだから、作者の名前も作品名も分からずともよい。私は増賀上人ほどに強い思いはないけれど、先生と生徒の行く末は気に掛かって仕方がない。『落窪物語』ではないが、この作品は「継母継子の物語で、その継母はPTA会長で町の有力者夫人、学校に対して強い発言権もあり、先生は教え子の継子をかばったために学校に居ることができなくなつて放浪しているのだ、最後は父親が娘の悲劇を知らなかったと詫び、継母は継子に謝罪し、二人はそれから本当の親子のように仲良く暮らした」などと、そんなセンチメンタルな少女小説を書いて、自分を納得させようかと思つたりもしている。

小学生のとき、家にあつた大人の読物雑誌や恋愛小説を親の目を盗んで密かに読んでいた。どうしてばれたものか、兄は「お前、この雑誌を読んでいたらどう」と意地悪い顔で詰問し、心優しい姉は「ちょっと、あんた、この本読んでいたの」と笑つた。意地が悪かろうが、心優しかろうが、私は少年

にあるまじき大変な悪事をしたように思い、〈明日から兄と姉に顔を合わせられない〉と、ひどく傷ついたのを憶えている。といつても、その雑誌名も恋愛小説の題名も記憶してはいない。やはり小学生のころ、姉がラジオにかじりつくようにして菊田一夫の「君の名は」を聞いていた。私はそれが「蛇の縄」と聞こえ、なんとも不気味な題名だと思つていた。

中学・高校生のころは、家にあつた講談雑誌や倶楽部雑誌を枕元に積み上げて読んでいた。大衆文学の面白さを痛快に味わつたものである。私が後に説話文学や『平家物語』のような大衆文学を勉強する学徒になつたのも、少年時代の読書傾向が多分に影響していると思う。ともあれ、少年時代の私は、文学に限らず、何事にもいいかげんな姿勢であつた。その姿勢は、とかく流れに任せ、なるようにしかなりはしないさ、と考えがちの今の自分を作つてしまつたらしい。

昭和(大正十五年)生まれ

堂 昌 一



私は大正十五年に生まれました。

人の集まるその場の雰囲気で、昭和だつたり、大正の人間だつたり適当に使いつけていましたが、もう止めます。

昭和生まれも、中年過ぎの脂ぎったジジイが多くなつたし、大正生まれともなればどうしようもない頑固なおじいさんです。

懐かしい戦前、そして辛かった追浜海軍航空隊の戦時中。戦後の深刻な食糧・物資不足に、ヤミ物資取引で三日間の荻窪警察での体験。もう充分に昭和を満喫しました。

平成は、平穩に暮していきたいと願うのみです。

記憶の中の三助

伊勢田 邦 貴



普段は考えたこともないのに、偶然、三助という言葉が目に入った。大昔の話だが親戚のお姉ちゃんに連れられて女湯へ、多分四才位だったと思う。おぼろげながら記憶にある。右を見ても左を見ても女ばかり、そこへ遅い男が当然のように居るから不思議と云える。全裸ではないが幅広の白い鉢巻き、それから必ず腹巻き、そして白い短い当時のパンツ、身に付けたものはそれだけで、お客さんと云っても中年の女性だろうね、若い娘さんたちは見て見ぬふりで別にキヤーキヤー騒ぐ訳でもない。人間の記憶は四才位でも馬鹿にはできないのではないか。お風呂の話から三助という職業にまで及んでしまった。

「異様の者」



志^し
村^{むら}
栄^{よし}
守^{もり}
(評論家)

歩行者天国の大惨劇からやや経過し、事件を起こした人物の過去が明らかにされてきた。

マスコミの取材は巡り巡って、家庭環境へと行き着くが、それで誰もが納得するとか、何かが判然とするということでもないようだ。イボリット・テーヌに端を発するとされる環境論も、家族・家庭というテリトリーは不得手ということなのだろうか。

それにしても、現代社会は、この家族・家庭というところへ配すべき視線、

関心、すなわちエネルギーの度合いが著しく貧弱とは言えないか。

核家族化は時代の流れで仕方ないとしても、人間存在の謎めいた部分は、家族というある意味で神域とさえ言えなくもないところに根があるかも知れないのだ。

翻って、今回の事件には時代の匂い、特徴を嗅ぎ分けた人が多かったのではあるまいか。いや、気配のように察知したことだろう。

と言うことが、どうしてもこういう

ところへと誘う。あの小林秀雄には青壮年期、ドストエフスキイが提出した問題に、心血を傾注したかのような作品群がある。『悪霊』について』には、現在、頻発するおぞましい事件の隠れた本質、核心にも通じると見える鋭い指摘があつて、あらためてその先見性に驚く。

「――言はば純粋な可能性と化した精神の地獄こそスタヴロオギンの地獄であつた」。

『罪と罰』のラスコオリニコフ、『悪霊』のスタヴロオギンと言えば、こんな表現はどうかとは思ふが、いわば悪魔的とも言える人物だ。ところが小林は、前者を評して、一見、意外にも事件の特徴をその「空想性」にあると書いている。(これも同著にある)。

起こした事件という現実と、その人物の思想(内面)の空想性という異様な対比――これを渾身の力で明らかにしようと試みた。

「精神の可能性」といい「空想性」といい、なんと現代人、とりわけ若い人に身近な言葉とは言えないか。機器類の普及は予想を超えて急激で、「可能

性と化した精神」とか「空想性」へと人間を誘い込む環境はいよいよ整いつつあると見えるからだ。

つまり、ロシヤの巨星がとうの昔に見抜いたラスコオリニコフとかスタヴロオギンの末裔?または「予備軍」が街を闊歩している時代の到来、と言えなくもないわけだ。

そんな社会がいずれは振り向かざるを得ない問題を、小林は時代に先行して書いていた。

「これは珍談ではない。徒然なる心がどんなに沢山な事を感じ、どんなに沢山な事を言わずに我慢したか」(小林「徒然草」)。

「珍談」とはもちろん、「この娘、唯栗のみ食ひて、更に米の類を食はざりければ」だが、「入道」が、「斯る異様の者」とした、このあたりのたつた数語が、ある日、突如、こちらの何かに反応し、驚いたことがある。その曙光はやがて光度を増し、ああそうだったのかと、ひとり勝手に得心したことがある。

言うまでもなく、私達は、家族という間柄に、社会の通念にはずれた行為

を目撃することのつらさをよく承知している。しかもやっかいなことに、時間の不思議な作用は、最初は些細な波浪でしかないと見えたものを、時として事件にまで成長させてしまうことすらある。

法師が生きた時代背景を考慮しても、この小話における「容美し」とされる評判の娘が「唯栗のみ云々」という性癖の持ち主であつたなら、それは奇異であつただろう。

また仮に、この話を現代に置き換えてみてもまったく同様か。「唯栗のみ食う」娘を前にして、現代人の知的解釈とか良識的判断はどのように反応するのだろうか。一笑に付す、あるいは黙殺する——そんなことが想定される。

しかし、ここで暫く開き直つてみる必要があるのではあるまいか。人間誰しもその存在のためには、空間的にも時間的にも関与しているものがあることは確実なのだ。それなのに、とりわけ後者には素つ氣無いとは言えないか。実はそれは、家族という身近に色濃く、しかし隠れるように存在しないか。小林の強い口調、「これは珍談で

はない」には、家族間のことはいかなることも「珍談」で片付けるべきではない!との強い意志をどうしても感得してしまうのだ。

繰り返すが、知的解釈とか良識的判断は大いにいいとしても、それ以外の発想には見向きもしない時代の風潮は、何か大きな落し物をしているのでは:と見えなくもない。

という疑念から、ベルクソンを少し覗いた者はこんな視点もあると秘かに思う。この世を生きる私達の日々刻々は、実在の噴出との応接、あるいはそれへの参画でもあり、周囲が「異様の者」と見る事象すら、とりわけ家族のことに關してはまったく別様に見る思想が、人間にはあるはずだと。

ちなみに小林「ドストエフスキイの生活」には、実在との応接または参画がこんな姿形で示されるところがある。「運命から割引きする事を知らず、ただそれに愛着する事が出来た人の無気味さが」。

ただならぬ過酷な運命にすら抱擁したと思われる、ロシヤの異才の姿が彷彿とする。

肝つ玉母さんが来た



桐原良光

(文芸評論家)

二〇〇八年夏の第二三九回芥川賞は、楊逸さんの小説『時が滲む朝』に決まった。ヤン・イーと読む。それこそ、いろはの「い」から日本語を学び始めたという四十四歳の中国人女性が日本語で中篇小説を執筆して、それが日本を代表する文学賞に選ばれたのだ。日本語を母語としない書き手の芥川賞受賞は同賞史上初めてということで幾つかの新聞は一面で大々的に取り上げ、毎日新聞は「日本文学史上の事件」と書

いた。

確かに凄い人のようだ。中国黒竜江省ハルビン市に生まれ、横浜の伯父から届いたカラー写真に映された美しい日本の光景に憧れて二十二歳で来日、日本語学校に学び、お茶の水女子大学では地理学を専攻して卒業、在日中国人向けの新聞社勤務を続けながら中国語で詩やエッセイを書いていたらしい。日本語で小説を発表し始めたのは〇七年の『ワンちゃん』からだというが、

日本人と結婚した中国人女性を生き生きと描いて好評で、この作品で文学界新人賞を受賞して前回の芥川賞候補にもなった。日本人との結婚・離婚の経験があり、日本語講師をしながら日本国籍の二人の子供を育ててきた。

小説『時が滲む朝』は、一九八八年七月、十人に一人という狭き門の大学統一試験を受けて地方大学に受かり、大学生活を始めた梁浩遠、謝志強らの若者群像から描写される。希望に溢れた学生生活を過ごす内に、やがて国外文化が学生たちにも及んで来る。テレサ・テンや香港・台湾の流行歌手のテープは、独自のルートで入手して（外に漏らさないように、音量をみんなの耳に届くぐらいまで下げ、全員が布団に入って息を潜め、高鳴る胸を押さえつつ、ひと時を享受する）存在だ。やがて文学サロンといった勉強会を通じて北京から新しい時代の流れも聞こえてくる。

「北京の大学に行っている友人からまた手紙が届いた。官僚の汚職と腐敗

に反対して、大学生は天安門広場で集会をして、ハンストなども行なっている。国家興亡、匹夫有責。僕らにも応援して欲しいと要請しているが」八九年五月の終わり、主人公たちも呼び掛けに応じて北京へ向かうと、天安門広場は全国から集まった学生でギッシリと埋まっている。何かが起こりそうだが、世の中が変わるかも知れない……。二日間の北京体験を終えた主人公たちは、高揚した気持ちを抱いて帰郷するが、六月三日朝になると空気がガラリと変わる。後に教師が告げた言葉でその全てが分かった。「装甲部隊が天安門広場に突入した」。その声は〈小さく重く低く、爆弾よりも強い衝撃だった〉。街へ出て抗議しようといきり立つ学生たちを、教師が断固とした声で押しとどめる。「いけません。大学の周りは既に厳重に警備されているから。これからは学業以外のことは一切してはなりません」

学業に専念し始めた主人公たちだったが、酔って学生運動を侮辱した男た

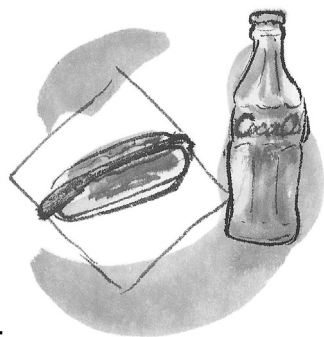
ちと殴り合いの喧嘩をやってしまった退学処分。農民工生活を経て、浩遠は日本人残留孤児の娘と結婚して日本に移り住んだが、日本でも「農民工」生活に変わりはなかった。パソコン技術を勉強で身に付けてからは生活に少しは余裕が生まれた。日本で中国の民主化を支援する団体に入った浩遠だったが、中国にとっては外国でのこのような運動など〈蚊の鳴き声〉ぐらいにしかならないことを知る。運動を商売に結び付けようとする同胞がいたことも幻滅だ。浩遠と日本生まれの二人の子供との間に言葉のギャップはあるが、彼らにとってはこの日本が〈ふるさと〉に他ならない。浩遠もそれを認めざるを得ないのだろうか……。

《天安門事件》という大事件を踏まえて描いているにしては全体に緊張感に欠けるような気がする。地元集会には〈我愛中国〉(Love You)などと注文に応じてTシャツを印刷・販売している若者がいるし、天安門広場へ出向いた学生たちは〈教科書の挿絵で

しか見たことのない〉名所を背景に記念写真を撮っているのだ。これらは、事実であったのかもしれないが、緊張感を殺いているような気がする。でもこれはきっと作家の大陸的なユーモアの発想なのかもしれない。〈小さく重く低く、爆弾よりも強い衝撃だった〉もそうだが、日本語としてこなれていない部分が少なくない。——などこの小説の欠点をあげつらうことは簡単だ。なにしろ『ガイジン』が日本語で書いた小説なのだから。

しかし、中国人にとっては最大のタブーであるかもしれない天安門事件を背景に学生たちの希望と挫折を骨太に描いた受賞作は、現代の日本人にはちよつと書けない作品であることは間違いないだろう。新聞の写真でみる楊逸さんは、堂々としていて〈肝つ玉母さん〉のようにも見える。彼女なら日本文学を任せておいても大丈夫のような気がするのだ。少なくとも〈後期高齢者医療制度〉などという〈日本語〉を考え出した〈日本人〉よりは。

まねき花



佐川 毅 彦

年に四ヶ月ぐらいいは沖縄の実家にいる。年老いた両親が二人だけで暮らしている。なかなか長生きである。琉球古来の食生活をしてきた親は年々弱っているとは思いますがまだ丈夫である。腹が立つくらい口もたつしゃで、頭もさえていいる。お向えもやってくる気配がない。

ワシらの場合はアメリカ軍が来てからというものは欧米風に悪くなり、

ソーセージの缶ヅメやハムなどの加工食品、コーラやサッカリンジュースなどを飲み食いして、野菜はあまり食わず、ゴーヤーもナーベラーもほとんど食べなかった。

ここ二、三年の間に二度も大病してしまい、入院して手術をした。今でも朝昼晩、大量のクスリを飲みつづけている。

その日はオバアに仏ダンにそなえ

るモチとサーターアンダギーこういてくわー（買ってこい）といわれたので、散歩をかねてでかける。

ついでに市立図書館にでもよってゆくかとそちらの方へ、足を向けた。

いつのまにか図書館のそばに池ができていた。

そこに一輪の大きな白いハスの花をみた。水中から茎が伸びていて、その上に花はついていた。

植物の事にあまりくわしくないのだが、沖縄にもハスが咲くようである。

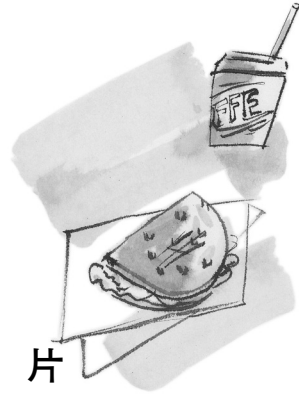
しかしなんとなく場違いな不思議な気がした。この世の花とは思えない。

あちら側にヨミの国があり、現世との境目にこの花は存在しているのではないだろうか。そしてだれか、やつてくるのを待っていて、あそこへひきずり込もうとテグスネひいて、待ちかまえているのではないのだろうか。

恐怖を感じた私は見なかったふりをして図書館へかけ込んだが、休館でドアは閉ざされていた。



真夏のシャーロック・ホームズ



片岡義男
(作家)

二〇〇七年の夏、東京では気温の高い日が続いた。その暑い夏のひときわ暑い八月なかば過ぎの午後三時、僕はひとりでお茶の水近辺にいて、腹ぺこだった。朝は七時に起きて朝食を食べたから、十一時前から空腹を感じ始めた。そして昼食の機会を逃したまま午後三時ともなると、空腹は頂点に達していた。

中央線で東京駅へいき、丸の内の北口を出て丸善に入り、四階の喫茶店で

フォカッチャ・サンドイッチを食べてコーヒーを飲んだ。軽食としては充分すぎるほどに充分なのではないか、と思える出来ばえだった。八重洲側にある景色の左右百八十度の広がり、大きな窓ガラスの外に見えていた。いくつものビルディングがまったく無秩序にぎっちりと重なり合うなかに、高層の建物がさらに何棟か建築中だった。その現場が夏の陽ざしを受けとめている様子は、未来への展望を感じにくい

ものだった。おそらくそのせいだろう、僕の思いは過去へとのびていき、六十年前、太平洋戦争が終わったばかりの夏へと戻っていった。

その日本に僕は幼子として生きていたが、世のなががどんな状態だったか、記憶はまったくない。戦争へと向かう時代のなかで日本人たちが国からさまざまなに強制された耐乏、つまり貧しさは、戦時下でその非情な過酷さを限度いっぱいまで高めた。そのような貧しさに敗戦後の混乱が重なったのだから、二〇〇七年の夏とくらべると、そこには途方もない落差があることは確かだ。その落差を体内に感じつつ食すれば、フォカッチャ・サンドイッチは必要にして充分という基準をはるかに越えて充分すぎるものだった。

そのようなフォカッチャのあと、おなじフロアの洋書売り場に入った僕は、古典文学の棚にシャーロック・ホームズが十冊揃って、きれいな箱入りとなっているものを見つけた。イギリスのペンギン・ブックスから出ているもので、

白地にオレンジ色を巧みに使った美しい装丁のペーパーバックだ。これまで一冊また一冊とばらで買ってきた僕は、早く全巻が揃うことを願っていたのだが、頭の片隅で想像しなくてもなかった全巻箱入りが、思いがけず手に入ることとなった。長編が四冊、短編が五冊、そして残りの一冊は著者名が「サー・アーサー・コナン・ドイルに倣って」とあるとおり、ドイル以外の作家がホームズを主人公にして書いた作品を収録したものだ。『アンコレクテッド（未収録）・シャーロック・ホームズ』という一冊がペンギンにあるが、これは箱入りセットには加えられていないようだから、箱入りではあるけれどコンプリート（全作品）ではないのだろう。『コンプリート・シャーロック・ホームズ』という一冊がおなじペンギンから出ているが、装丁が気に入らないので僕は持っていない。

シャーロック・ホームズの長編と短編のすべてを二冊のペーパーバックに収録したコンプリートが、アメリカカ

バンタム・ブックスというペーパーバック叢書から刊行されていて、これは僕も持っている。題名にコンプリートとうたっているからには、この二冊でシャーロック・ホームズの物語のすべてを読むことが出来るのだろう。二冊合わせて厚さは八センチで、もの静かに落ち着いた装丁はじつに好ましく、手にしたときの感触はペーパーバックそのものだ。

シャーロック・ホームズを原文のコンプリートで持っていたいという僕の願望には、理由がふたつある。ひとつは、とにかくコンプリートを気にいった版で持っていたいという、ごく単純な理由だ。もうひとつは、僕が中学生の頃に初めてシャーロック・ホームズを読んだときの、日本語訳の印象がいまでも僕の記憶のなかに色濃くあり、それと原文との対比の関係というものが、僕にとっては終わることなく続いているからだ。

延原謙という人が翻訳したシャーロック・ホームズは、日本語訳として最高

のものであり、中学生の僕はそれを読んだ。いまでも文庫本で手に入るが、訳文ぜんたいにわたって改定がほどこされ、その結果としてオリジナルの面影はほとんど消えている。延原謙の翻訳にある陰影に満ちた魅力的な奥行きに中学生の僕はとらえられ、以後の僕はシャーロック・ホームズに関しては、延原謙・訳の世界にからめ取られたままだ。

原文つまり英語で読むとじつにあっけなく、探偵ホームズの論理の筋道だけが小説になったもののように思える。シャーロック・ホームズの短編をふと読むとそのたびに、コナン・ドイルの書いた原文に、延原謙が翻訳した日本語が、僕の記憶のなかでは緊密に重なり合う。改定される前の延原謙・訳のシャーロック・ホームズの全冊を僕は大事にしているから、それとの対比の関係のなかに均衡を作り出すためにも、シャーロック・ホームズのコンプリートは必需品なのだ。

鉛筆を削って叱られた



片岡義男
(作家)

大学生の頃から商業雑誌に文章を書き始めた僕は、緑色で印刷されたコクヨの、A4サイズの四百字詰め原稿用紙に、ボールペンで書いていた。これなら良さそうだと思うボールペンを文具店で買うのだが、なにしろ時代はまだ一九六十年代が始まったばかりだったから、日本のボールペンには改良の余地が大きくあった。けっして書けなくはないのだが、ペン先のボール

は小さく、しがつて書ける字は線が細く、なおかつインクの性能のせいか、かなりの筆圧が必要だった。

当時のアメリカのボールペンには、太い線の書ける、滑らかでほど良い粘りの書き心地のものが、ごく一般的に存在していた。それを米軍基地の売店で買い込もうと思いついた。二十代のなかばを過ぎた頃には、基地との関係は身辺から消えた。だから日本の

ボールペンを使い続け大学を卒業してフリーランスのライターになった頃、鉛筆に替えた。

原稿用紙に文字を書くという行為に關して、可能なかぎりストレスを少なくする必要を感じたからだ。筆圧を軽くするには鉛筆のほうがいいだろう、と僕は思った。

キャップをかぶせた鉛筆一本をシャツの胸ポケットに、僕は主として神保町の喫茶店をはしごしながら、朝から晩までいろんな原稿を書いた。芯を削るためには、スイス・アーミー・ナイフの大小二枚の刃がついた、小さなポケット・ナイフを使った。削りかすをフロアに落しながら喫茶店で鉛筆を削っていたら、これに削ってください、と灰皿を目の前に突き出されて、美人のウェイトレスに叱られたことがあった。

紙ナプキンを広げてそこに削ることをしばらく続けたあと、シャープ・ペンシルをへて芯ホルダーへと、筆記具は変わった。芯ホルダーの芯削りは、こ

く小さなもので、削った芯の黒い粉をためておく容器の役目も果たしていた。

芯ホルダー、芯削り器、消しゴム、それに原稿用紙を持って、僕は毎日のように神保町をあっちへいったりこっちへ来たりして過ごした。芯ホルダーはやがて速記者用の小さなシャープ・ペンシルへ替わり、そこからさらに、○・九ミリの芯を使うモンブランのシャープ・ペンシルへと変化した。

ここまでの期間は十年なかった。せいぜい七、八年だったろう。頭のなかに出ていく文章を、かなりの速度で次々に、しかも毎日のように大量に書くためには、筆記具をさらに替える必要にせまられた。あとは万年筆しかないわけだから、しかたなく、僕は万年筆で字を書く人となった。駿河台下の金ペン堂の主人が僕の字を見て選んでくれた万年筆は、あらゆる意味で僕にぴったりだった。だから僕はその万年筆を、何年にもわたって、何本も使うことになった。

もつとも軽く流れるインクを見つけ、

そのインクおよびペン先との相性を検討して紙を選び、僕の字の大きさと桁目のサイズをきめて、二百字詰め の原稿用紙を数万枚作った。そしてそれを使い果たした頃、小型で普及品のワード・プロセッサが登場した。オアシス・ライトという名のもので、液晶のスクリーンは僕の人さし指一本を横にしたほどの大きさだった。そのスクリーンには、打ち込む文字が七つだけ出た。打ち込む端から小さなスクリーンの外へと文字は出ていき、常にスクリーンのなかにあるのは七文字だけなのだ。

これは一種の冗談だろうと思ひ、僕も冗談に加担する気分で買い、その日のうちに使ってみた。短いエッセイをひとつ、初めて使うそのワード・プロセッサで、僕は書いた。液晶スクリーンにあらわれる文字がわずか七つでも、なんの支障もなしに、それまでとまったく変わることなく、文章は書けるのだった。自分が書く文章はすべて頭のなかで出来上がり、ワード・プロセッサを含めて筆記具は、その文章を紙

の上にとまず固定するためだけのものなのだ、ということに僕は発見した。

いまま文章はプロセッサで書いているが、鉛筆からシャープ・ペンシル、ボールペン、そして万年筆まで、僕が気に入ったものが何種類も、大量に手もとにある。店で見かけて気持ちは動くたびに買ったものが、たまりにたまっていつのまにか大量となった。鉛筆削りや芯ホルダーの芯削りなども、ざくざくとある。それらのものがたくさんある様子は、原稿用紙に文章を筆記具で手書きしなくなっ てからの年数を、端的に物語っていると僕は思う。

全部ではなくとも一部分は、手書きにしようかと考えているところだ。まず鉛筆から、使いなおそうか。これまでのすべてをなしにしてゼロからのスタート、というわけにはいかないと思うが、もし次の原稿を鉛筆で書いたなら、それはじつに四十年ぶりのことになる。このことには心の底から驚いている。

ハイドンゆかりの地、アイゼンシュタット



さかもと ふさ

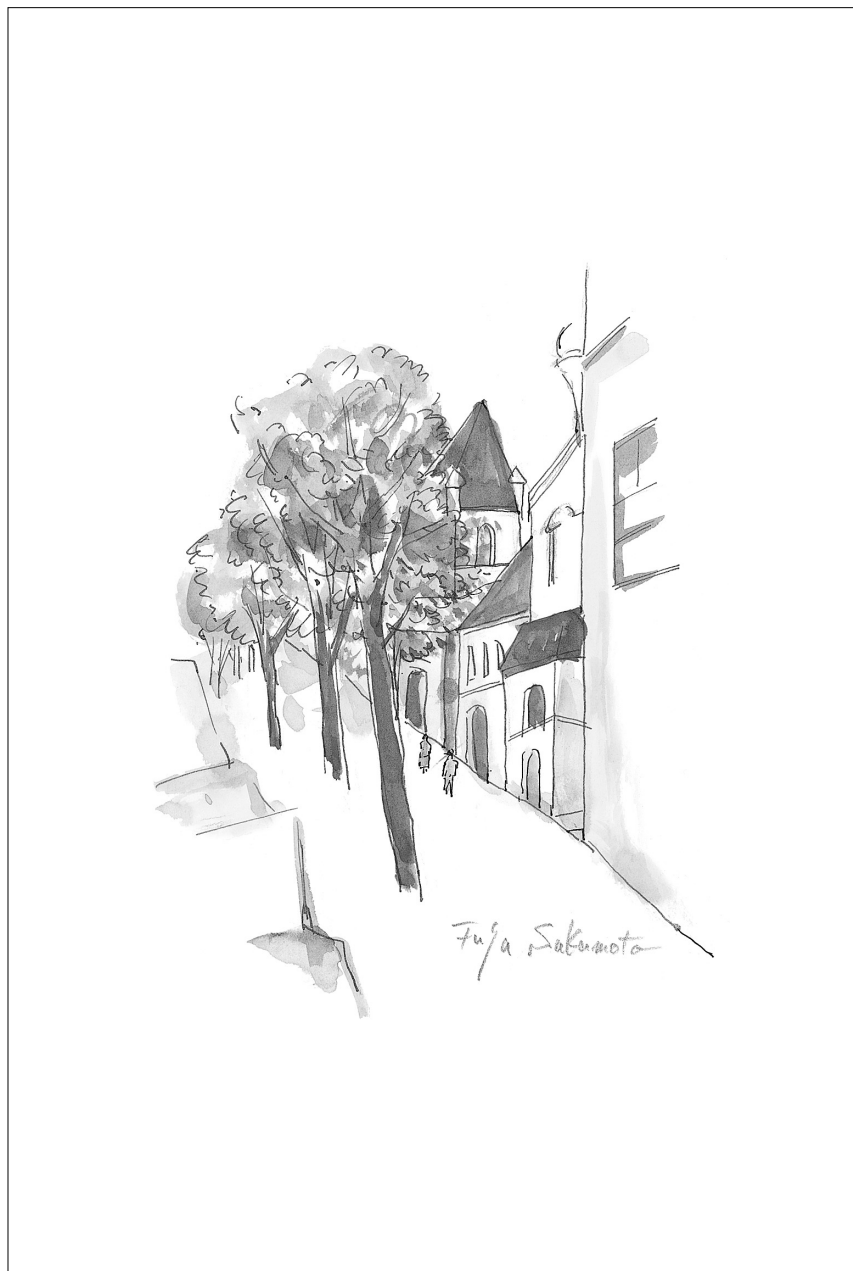
(型絵染版画家、エディター
イラストレーター)

曲を知っている」と訪ねてみたが、答えられる人はいなかった。日本人にとって、ハイドンは遠い存在であるのかもしれない。

その州都はアイゼンシュタットである。

ハンガリー領主のエスターハージ侯爵の居城があり、ハイドンがこの城の楽長として三十年間努めた。来年はハイドン没後二〇〇年になり、ハイドンにまつわるイベントがたくさん行われる。帰国して身近の人に「ハイドンの

ウィーンの南駅からバスで一時間、ハンガリーとの国境にかけて広がるブルゲンランド州。第一次大戦まではハンガリー領だったために、家の造りにも特徴があり、エキゾチックな雰囲気を感じさせる。周辺には葡萄畑が広がり、温暖な気候で葡萄栽培に適し、品質の良いワインが作られる。



里山の四季



新田啓造

(ジャーナリスト)

都心から急行で四十分。郊外にはちがいないが、そこには里山の気配が漂っている。

終の住処と決めやってきたのは二十数年前。前には加治丘陵があり、後ろには人間川が流れている。駅前といっても、小さな喫茶店が一軒とコンビニエンスがあるだけ。淋しいと言えば淋しい駅前である。二十年経っても一向に変化がない。これもまた不思議な気がする。「こんなと田舎にきちゃって」

といていた、移ってきたとき小学生だった娘二人も、いまは結婚してよそで暮らしている。

最初にこの地に馴染んだのは妻で、友だちも多くでき、毎日忙しそうに出かけている。何をしているかというところ、近くの里山を歩き回り、食べられるものを片っぱしからとってくる。

さすがに一人で出かけて採ってくるわけではなく、仲間がいる。年齢も同じくらい（六十歳前後）で、そろって

収穫することに目がないのである。考えてみればこの世代は、昭和二十年前後の生まれで、いつてみれば、戦後の食糧事情のもつとも悪かった時代に生まれたことになる。食べる物を採ることに執着するのは当然かもしれない。更に言えば、木苺（きいちご）、山桃（やまもも）、桑の実など、収穫のタイミングがある。二、三日のずれで熟した実にありつけないこともある。その点も妻たちのグループはしっかりしていて、ぬかりがない。朝夕の散歩が見回りの時なのだ。人間川に添って飯能方面に出かけたり、狭山方面に出かけたり、獲物によっていくつかのコースがあるようだ。そして、タイミングを見はかちって収穫する。

よく聞いてみると泥棒ではないらしいが、その執念は半端ではない。四月の声を聞く活動を開始する。人間川の河川敷での野蒜（のびる）採りである。と同時に孟宗竹の荀堀り、芹（せり）やクレソンも採れる。五月になると桑の実が黒ずんでくる。菜の花の新

芽もつめる。梅の実が大きくなる頃には杏子（あんず）も色づいてくる。銀杏（ぎんなん）拾いも忘れてはならない。

六月になると山桃が熟し、樹の下面が落ちた実で赤く染まる。それを拾ったり、ゆすったりして収穫する。山桃、桑の実、梅、銀杏等はジャムにする。手作りジャムのビンが増えると、なかなか豊かな気分になる。

六月後半の楽しみは淡竹（はちく）、真竹（まだけ）採りである。淡竹は灰汁がなくて料理も簡単。真竹は多少灰汁ぬきが必要だが、香りがあつて実に美味い。

夏から秋にかけても、栗拾い、胡桃（くるみ）拾い、きのこ狩り、あけび採りと忙しい。茗荷が大量に採れたり、山椒の新芽をつんできたりと自然の恵みは書き出したらきりが無い。

蕨（わらび）や山独活（やまうど）も里山にないわけではないが、理由があつて地元では採らない。というのは、例年、信州白馬方面へ遠征しているか

らだ。信州の山や谷に入ると、本当に立派な山菜が採れる。蕨も山独活も埼玉の里山で採れるものとは比較にならない。太さも長さも味も違う。五月の第三週と決めて、もう二十年近く出かけている。

十月の連休には群馬の山に入る。山ぶどうがとれるからだ。去年はワインが五本できた。

山ぶどう狩りの仲間は、駅からちよつと外れた一杯飲み屋の常連たちである。人のよいママ（といっても六十半ば）が、これまた大の山菜採り好きで、お店の年間スケジュールに組み込まれて五年が過ぎる。浅漬けのワインは、その店の忘年会に花を添える。自分たちで採った山ぶどうで造ったワインである。甘酸っぱい香りと味のよいことは言うまでもない。

加治丘陵は鳥類保護区に指定されているため規制も厳しく、一向に開発されない。そこがまた素晴らしい。入間川の水質は、ここ二十年、変わりがなような気がする。大してきれいにな

るわけがなく、そうかといって汚れがひどくなったわけでもない。夕風の頃には川面を跳ねる魚の姿がしばしば見られる。

都心から離れたこの地にやってきた当時、あちこちに「まむしに注意」の標識があつたが、さすがにここ十年くらいは、その噂さえ聞かなくなった。

里山も、見えないところでは、それなりに変わっているのだろう。いつまでも桑の実が揺れ、木苺のジャムが食卓を飾る日が続けばいいのだが、それはきつと難しい気がする。

妻たちの活動は、ズーッと続くに違いない。ある日突然ということはないにしても、収穫が少しずつでも減ってきたら、そんな日が近いような気がするのとは考え過ぎだろうか。

そのためには何をすべきか、私には判らない。気まぐれに河川敷のゴミ拾いをしたり、土手を飾る花の種を蒔いたり植えたりはするが、どんなものか。今朝も小鳥の声が目が醒めた。妻は散歩に出かけ、どうやら居ないようだ。